

## ニューロリハビリテーションと運動療法

東京慈恵会医科大学 リハビリテーション医学講座 安保 雅博

我々の脳卒中後遺症に対する経頭蓋磁気刺激療法やボツリヌス毒素治療を用いた戦略的治療を論文紹介しながら述べる。

我々は、2008年4月より脳卒中後遺症である失語症に対して、fMRIの結果から経頭蓋磁気刺激部位を決定し、それに基づいた反復性経頭蓋磁気刺激と集中言語聴覚療法の併用を世界に先駆けて治療として体系化し、失語症治療としての有効性を報告してきた。また、同様に脳卒中後上肢麻痺患者に対する反復性経頭蓋磁気刺激と集中的作業療法の併用療法 **NEURO** (NovE<sub>I</sub> Intervention Using **R**TMS and **O**ccupational Therapy) も世界に先駆けて治療として体系化し、脳卒中後上肢麻痺治療としての有効性を報告してきた。現在、脳卒中後遺症である嚥下障害や下肢麻痺にも適応拡大し、その有効性を報告している。

2014年6月にClinical Neurophysiologyに「Evidence-based guideline on the use of repetitive transcranial magnetic stimulation (rTMS)」と題されたrTMSについてのガイドラインが発表さ

れた。このガイドラインでは、すでに多く発表されたエビデンスに基づいたうえで、脳卒中後麻痺に対するrTMSの使用はグレードBで明確に推奨されている。我々の英文論文も12本引用されている。また、この併用療法に関するRCTとしては、NEURO-VERIFY研究という報告(Abo M, et al., International Journal of Stroke 2013;9:607-612)をした。結果として、rTMSと集中的リハの併用療法の効果がCI療法の効果に勝るとも劣らない可能性が示唆された(CI療法はグレードAで推奨されている)。この麻痺側上肢運動機能を有意に改善NEUROのメカニズムはどのようなものなのか?SPECTやfMRIの評価により、Neuromodulationを説明する。

また、2010年10月に上肢・下肢痙縮に対してボツリヌス毒素治療が保険収載され、いち早く戦略的治療手段として使用している。痙縮の改善に対してはLevel A evidenceであるが、機能改善目的のボツリヌス毒素治療の効果について、自験例から検討する。

## 歩んだ理学療法士の道程 50年—理学療法のルーツ

神戸大学名誉教授 武富 由雄

**理学療法士身分制度制定までの歩み**：明治から昭和の時代まで、病院や診療所で外科療法の一助として医療マッサージや物理療法に携わる技術者に、医学者は学術的、技術的發展を推進、身分制度確立へ積極的に取り組む。

**リハビリテーションとの出会い**：昭和35年、勤めていた大阪大学医学部附属病院整形外科療室の場で身を以て「Rehabilitation」と「Physical Therapy」と出会う。

**法的身分制度確立**：昭和40年、国会において「理学療法士及び作業療法士法案」が可決、制定、そして公布、特例措置により昭和41年の国家試験受験、合格、そして免許取得。

**日本理学療法士協会創設活動**へ：協会設立へ国立療養所東京病院清瀬リハビリテーション学院卒第1期卒業生合格者と特例措置合格者の有志が準備活動開始、昭和41年協会が発足。

**世界理学療法連盟加盟への端緒**：昭和42年、第5回世界理学療法連盟の総会・学会へオブザーバーとして出席、協会加盟への端緒、

国際的發展に繋げることへ。

**国際的活動**へ：昭和43年、アフガニスタン国へ医療派遣専門家として公務出張、それ以後、開発途上国から派遣された研修生への指導、国際スポーツ大会での診療担当など国際的活動展開へ。

**医学部保健学科設置**：昭和57年、文部大臣から神戸大学へ転任の命、理学療法学科設置に奔走、短期大学部から医学部保健学科へ昇格、高等教育へ歩みを進めた。

**学術活動**：全国研修会長と日本理学療法士学会長を務め、国際学会へも参加、学会員として学術活動を進めていった。

**社会活動**：未知であった理学療法を社会に根付くまで自治体や医療機関が設置した各種委員会や会合に参加、社会活動に足を踏み入れる。

**理学療法のルーツ**：理学療法の原点をふり返って。

歩んで来た道を前方に据えて見る、聞くことができる。本講演が未知の理学療法的发展への縁となればと思う。